

データで見る美術・造形・芸術系大学の ジェンダーバランス半世紀

1973 – 2025

文部科学省「学校基本調査」より

2026年6月29日

NMWA Japan ジェンダーバランス調査 | 出典: 文部科学省「学校基本調査」(e-Stat)

本資料について

利用データ① 学校基本調査

文部科学省・e-Stat

対象期間：1973～2025年（毎年）

学部別 学生数（在学者）→ 学部生の女性比率・学部生数

学部別 教員数（本務者・職名別）→ 講師/准教授/教授の女性比率

利用データ② 学校教員統計調査

文部科学省・e-Stat

対象期間：1998～2022年（3年ごと）

専門分野別 本務教員（全職階）→ 分野別・系統別の「反映率」

対象と指標

対象＝美術・造形・芸術系学部（音楽・デザイン・工芸の単独学部は除く）／比較＝大学全体（全分野）

指標＝女性比率（女÷計）・反映率（本編＝教授女性%÷学部学生女子%、分野別・系統別＝教員〔全職階〕女性%÷学生女子%）／全大学（国公立）・本務者

データの限界・ご留意点

- ・「学部」単位の集計のため、学部内のデザイン・映像・音楽学科の学生・教員も含む（純粋な美術のみの数字は巻末の参考で別掲）
- ・教授など母数の小さい区分は、古い年や美術系で単年変動が出やすい
- ・分野別・系統別の反映率は、学生（学校基本調査）と教員（学校教員統計調査）という別調査の突合＝水準でなく趨勢の比較として解釈
- ・全職階教員ベースの反映率は3年ごと（学校教員統計調査の周期）の値
- ・政府統計は設置者別・昼夜別で同じ数字が複数シートに分かれるため、二重計上を避け「計」「総計」を明示的に選択

主要な発見

美術系学部の学部生

68.4%

が女性（2025年度）

1973年の30.6%から上昇

美術系学部の教授

21.4%

が女性（全大学・2025）

1973年の5.1%から上昇

学部生と教授の差

47.0pt

女性比率のギャップ

「学ぶ側」と「教える側」の断層

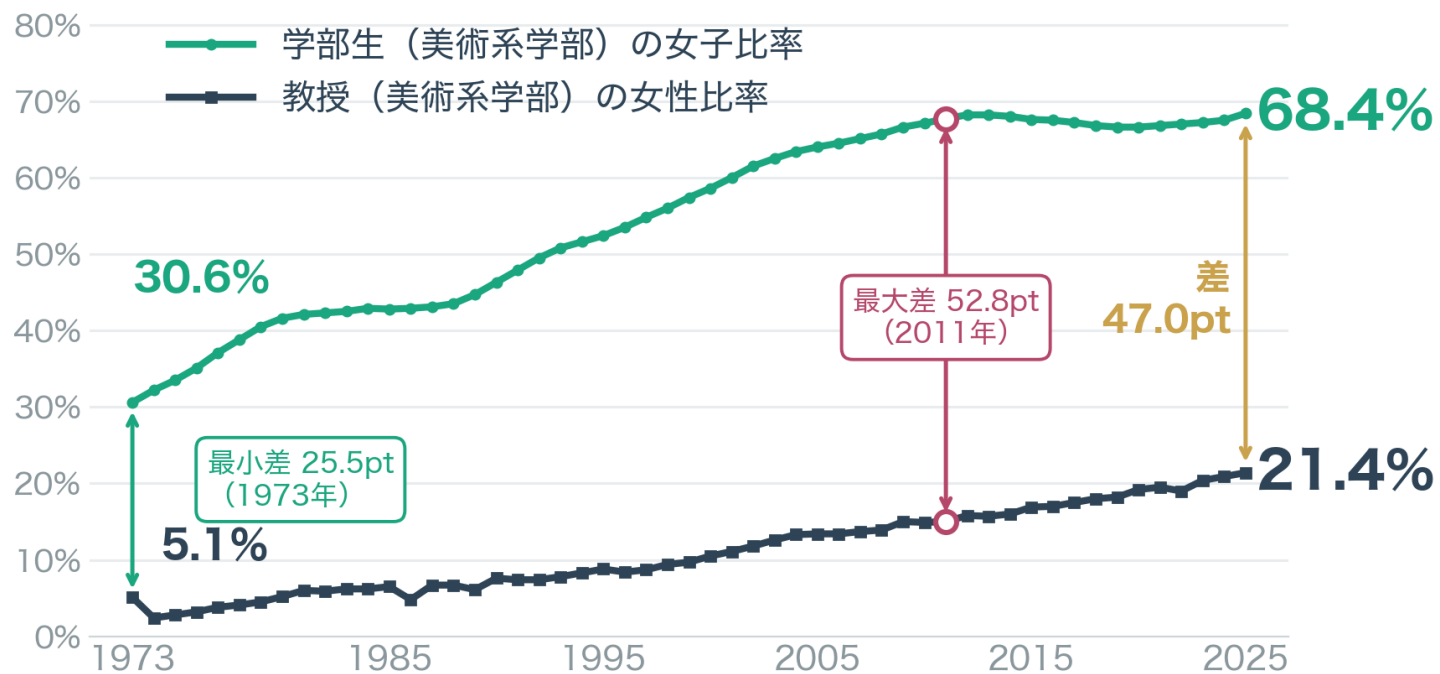
美術・造形・芸術系学部（以下、美術系学部）では学ぶ側の約68%が女性であるのに対し、美術系学部の女性教授の割合は約21%であり、「教える側」になると女性が激減する。

ただし、これ自体は美術系学部には特有ではなく、美術系学部の女性教授率(21.4%)と大学全体・全学部のそれ(20.1%)がほぼ同水準であるように、大学全体に共通する構造である。

美術系学部の問題は、学ぶ側の女性の伸びに対して、教える側の伸びが長らく追いついておらず差が広がっていることである。

美術系学部：学部生と教授の女性比率の長期推移（大学・1973–2025）

学部生・教授ともに学部別「美術系学部」の女性比率（1973–2025）



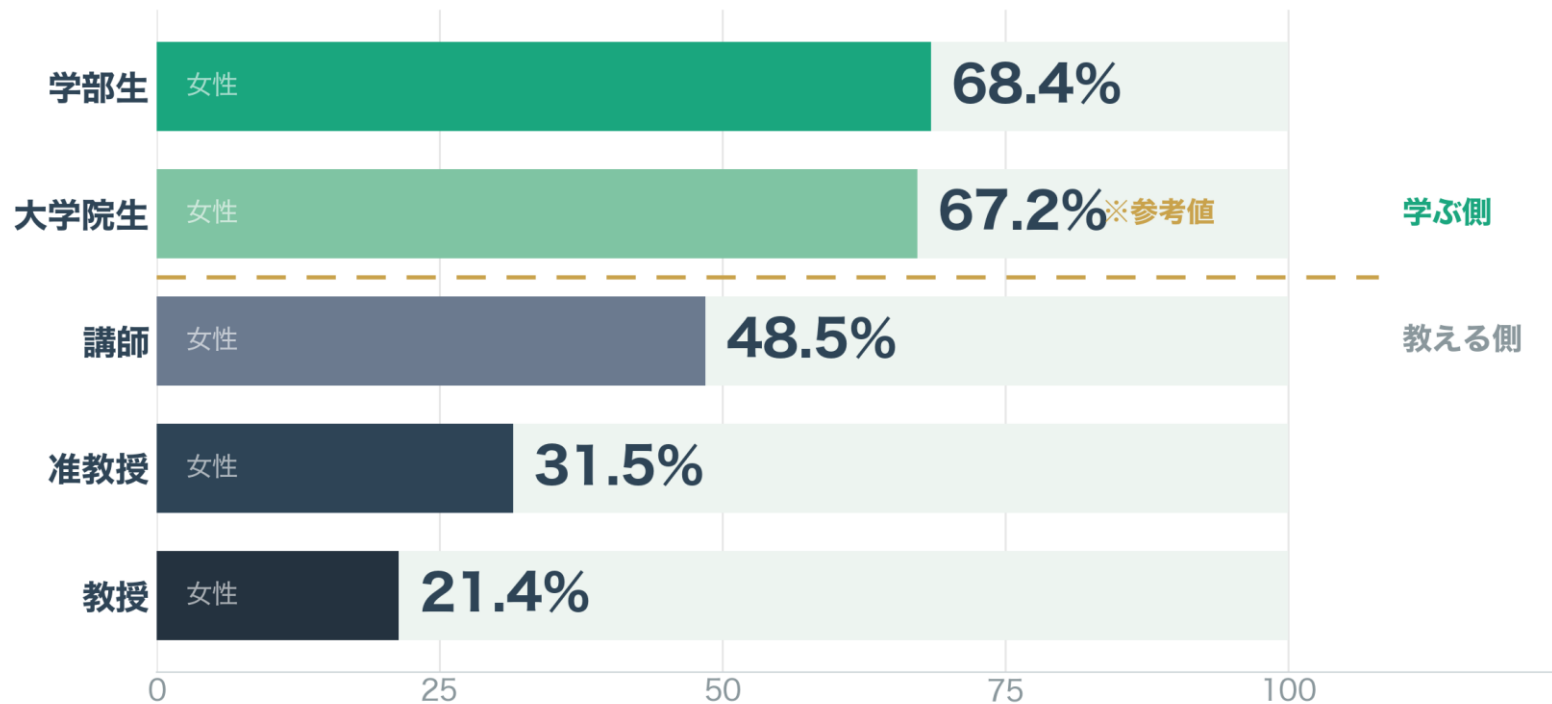
半世紀で学部生は31%→68%へ倍増。教授も5%→21%へ上昇したが依然2割で、両者の差はむしろ拡大（2025年で約47pt）。
「学ぶ側の女性率」の伸びに「教える側」が追いつかない非対称な状況が継続

出典: 文部科学省「学校基本調査」。学生・教授とも学部別「美術系学部」(1973-)。4年制大学・本務者。教授は母数小で単年変動あり。

母数（美術系学部 女/計）：2025=学部生 36,433/53,242・教授 242/1,130 / 1973=学部生 5,941/19,407・教授 10/198

リーキーパイプライン（2025年・美術系学部・全大学）

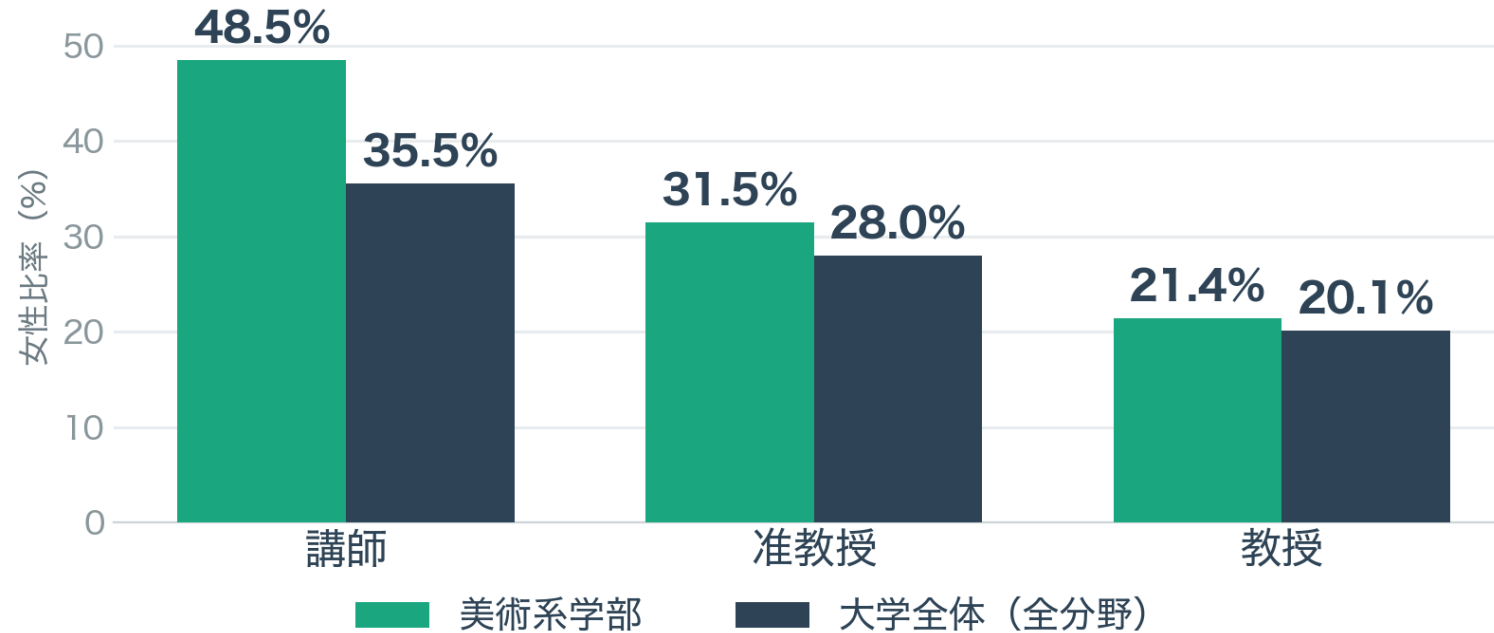
学ぶ側から教える側へ — 各段階の女性比率（学部生→大学院生→講師→准教授→教授）



学部生68.4%・大学院生67.2%(※参考値)と学ぶ側は女性多数。対して、教員になると講師48.5%→准教授31.5%→教授21.4%と低下し、上位職になるほど下がる傾向。

美術系学部 vs 大学全体（職位別の女性比率）

美術系学部と大学全体（全分野）の比較（2025年）

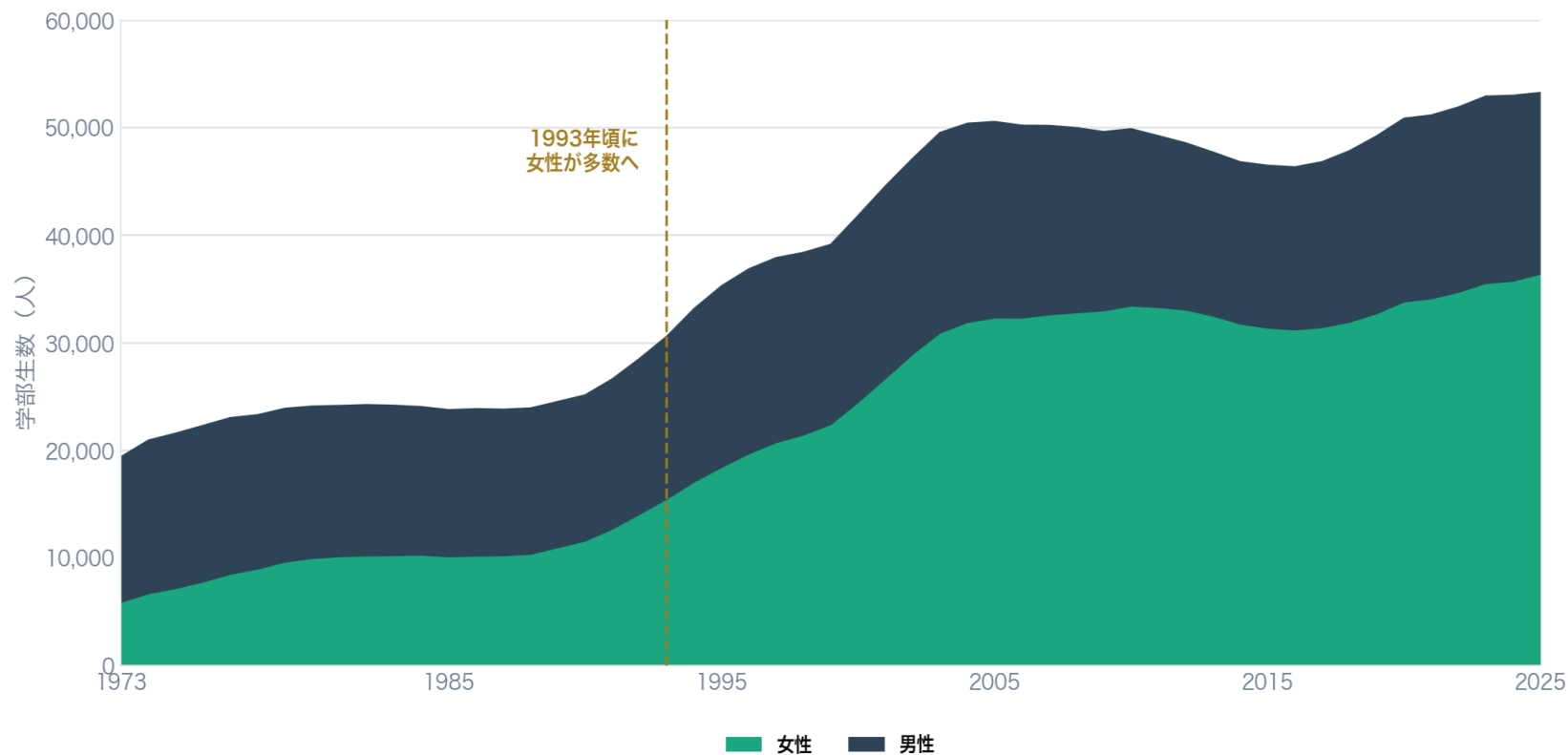


各職位とも美術系学部は大学全体（全分野）より女性比率が高い（教授21.4% vs 20.1%）。

「美術系学部が特に冷遇」ではなく、学ぶ側→教える側で女性が激減するのは大学全体に共通する構造である。

美術系学部の学部生数の推移（男女別）

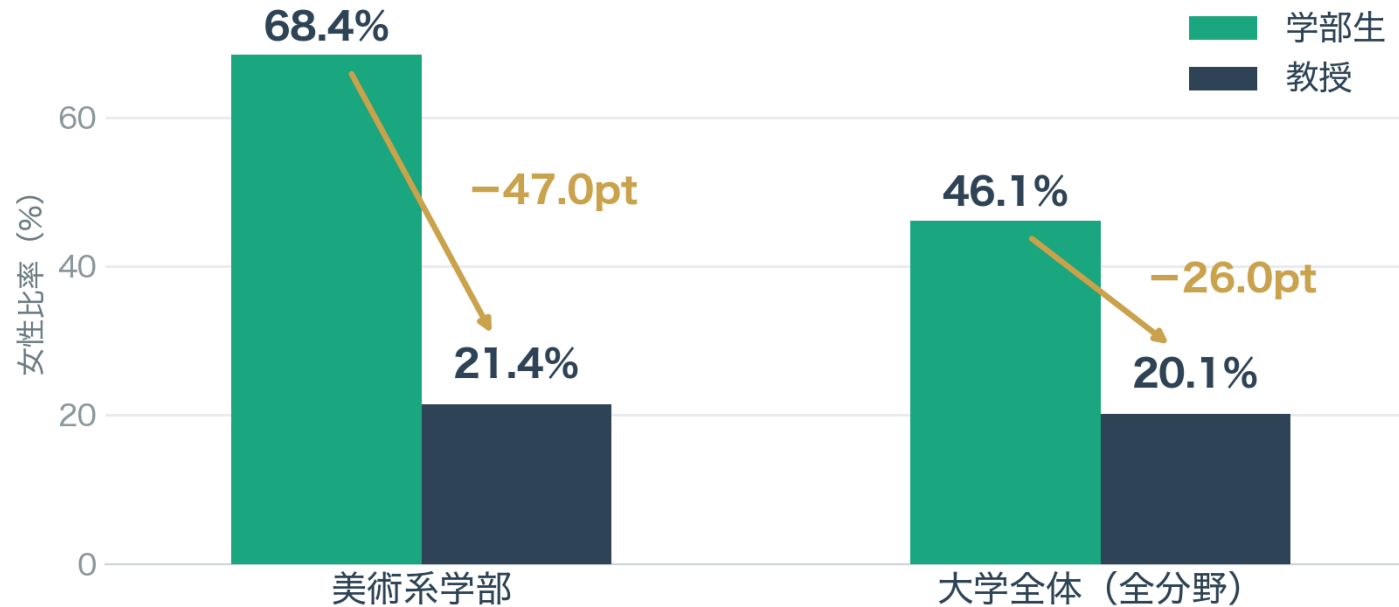
1990年代前半に女性が多数へ転じ、以降拡大（1973-2025年度・全大学・美術系学部）



1973年は男性が多数だったが1990年代前半（約1993年）に逆転。以降、美術系学部の女性が一貫して拡大。母集団（学ぶ女性）は十分に存在し、教授職の少なさは供給側の問題では説明しにくい。

学ぶ側と教える側のギャップ（美術系学部 vs 大学全体）

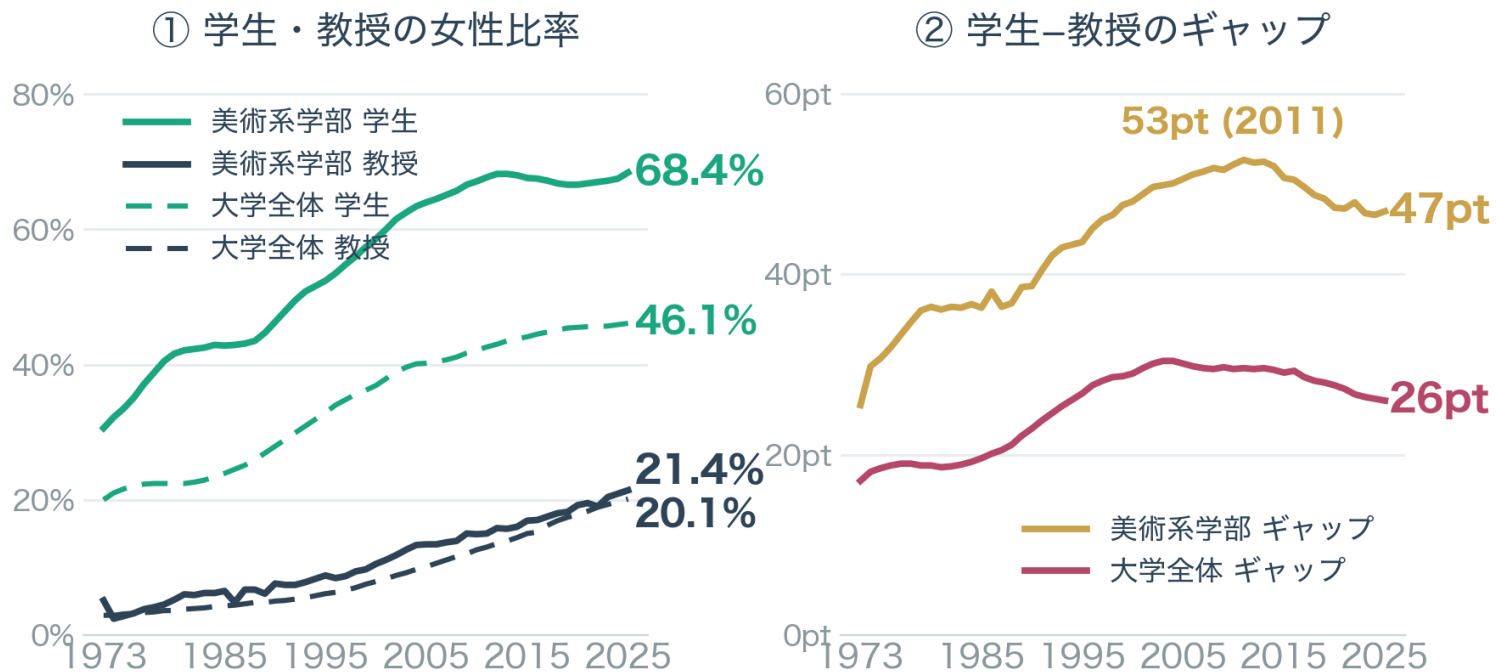
学部生の女性比率は、教授になるとどれだけ縮むか（2025年）



学部生→教授で女性比率が激減するのは大学全体に共通の課題だが、美術系学部は学部生が約7割のため落差が-47.0ptと際立つ（大学全体は-26.0pt）。「学ぶ女性」は十分いるのに上位職に至らない構造。

学生・教授の女性比率とギャップの推移（美術系学部 vs 大学全体）

左＝学生と教授の女性比率／右＝学生-教授のギャップ（学部別・美術系学部／全分野・1973-2025）



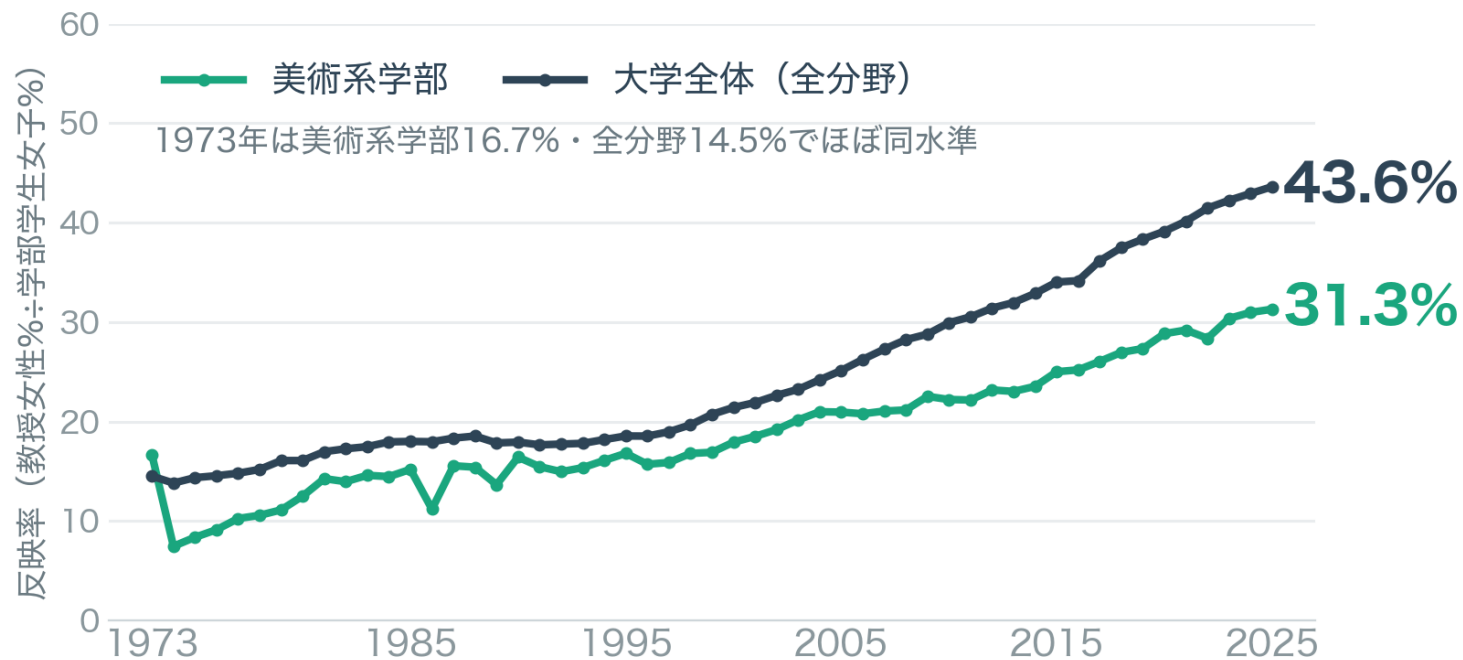
学ぶ側（学生）は美術系学部68%・全体46%へ上昇する一方、教える側（教授）は美術系学部21%・全体20%にとどまる。
両者のギャップ（右）は美術系学部が一貫して大きく、2011年に53ptでピーク後やや縮小するも近年下げ止まっている。

出典: 文部科学省「学校基本調査」学部別（学生数・教員数 本務者）。学生・教授とも美術系学部／全分野で集計。全大学・国公立。

母数（美術系学部 女/計）：2025＝学部生 36,433/53,242・教授 242/1,130

教授への反映率の推移（美術系学部 vs 大学全体）

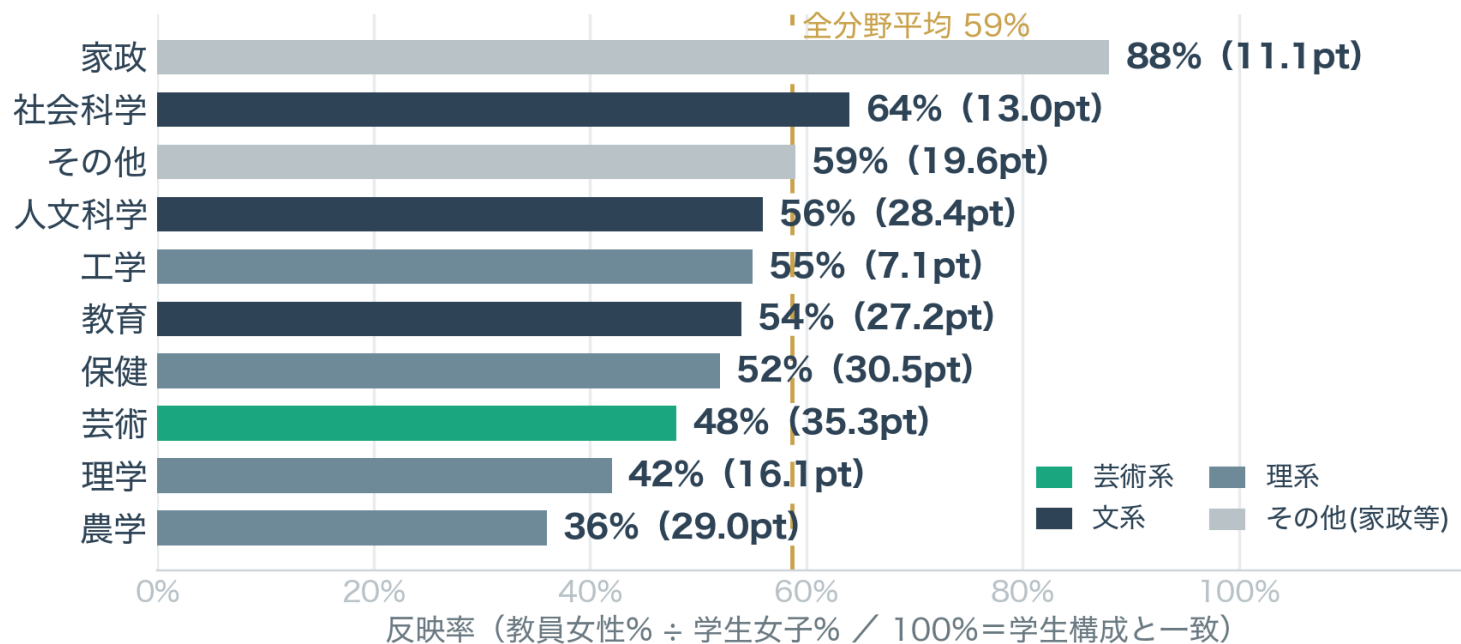
反映率 = 教授の女性比率 ÷ 学部学生女子比率（100%だと学生構成と一致 / 1973-2025・学部別）



1973年は美術系学部16.7%・全学部14.5%でほぼ同水準。だが大学全体は43.6%まで前進した一方、美術系学部は31.3%止まりで差は拡大。学ぶ側の女性が約7割なのに教授職への反映が遅く、“学ぶ側→教える側”の引き継ぎは大学全体に劣後しており、相対的に状況は悪化している。

分野別に見た教員への反映率 — 芸術系は系統として最も低い

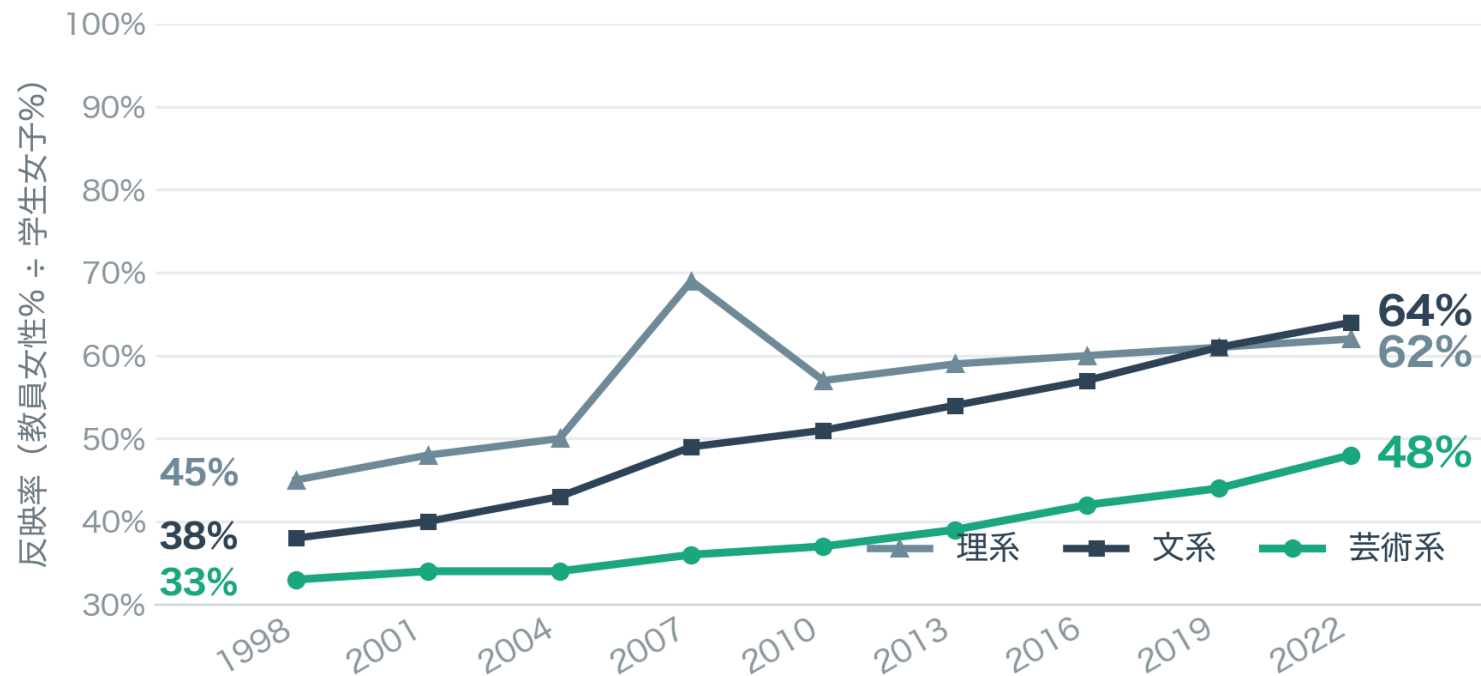
教員の女性比率 ÷ 学生の女子比率 (2022年・低いほど"教える側"への移行が進んでいない)



系統別では芸術系48%<理系62%<文系64%と、芸術系が最低。ただし個別分野では農学36%・理学42%がさらに低い。
pt差 (学生女子%-教員女性%) では芸術が35.3ptで全系統中最大。

系統別 教員への反映率の推移 — 芸術系は改善も最も遅い

教員の女性比率 ÷ 学生の女子比率（100%＝学生構成と一致／系統別・1998–2022・3年ごと）



1998年は芸術系33%と文系38%がほぼ並んでいたが、文系は64%まで改善する一方、芸術系は48%止まり。
学ぶ側に女性が多いのに、教える側への移行が最も進んでいない。

出典: 文部科学省「学校基本調査」(学生=関係学科別) + 「学校教員統計調査」(教員=専門分野別 本務教員) 1998–2022年。理系2007年の上振れは保健(看護系)拡大の影響。

母数(2022・各系統 学生計・教員計): 芸術系 学生 77,855・教員 5,130 ほか文系・理系(1998–2022の各年値を保持)

まとめ

学ぶ側は女性が多数

美術系学部の学部生の約68%、大学院生の約67%（※P5の参考値）が女性（全大学）。

教える側で激減

美術系学部の教授は女性21.4%。学部生との差は約47ポイント。

美術系学部に特有ではなく 日本の大学の構造的特徴

美術系学部の教授(21.4%)は大学全体・全分野(20.1%)とほぼ同水準（わずかに上）。
学ぶ側→教える側の激減は大学全体に共通。ただし、学生の女性比率と教授の女性比率のギャップは、美術系学部の方が大きい。

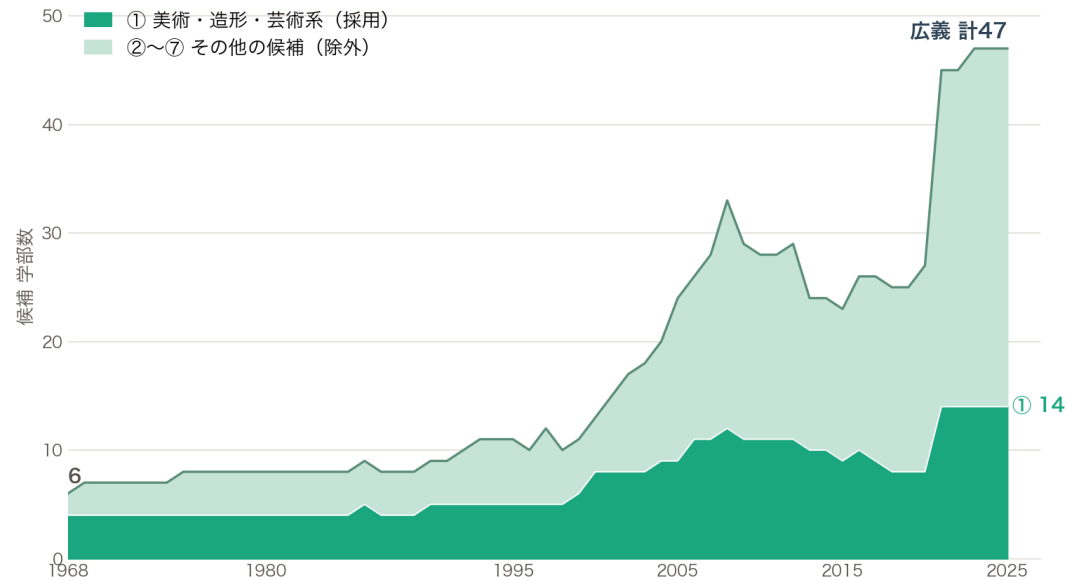
美術系学部の課題は 学ぶ側の女性の伸びに対して、 教える側のキャッチアップが遅いこと

反映率(教授の女性比率÷学生の女子比率)で評価すると、1970年代は大学全体と比べても、大差がない状態であったが、美術系学部はその後の女性学生の伸びに教える側の伸びが追いつかず、結果として、他の学部と差が開いてしまっている。

補足：本分析における「美術・造形・芸術系学部」の定義

長期トレンドの一貫性を保つため、1968年から存在する「① 美術・造形・芸術系」に限定

美術系の候補学部は年々増加（6→47学部）



採用範囲：① 美術・造形・芸術系のみ

【採用①】 美術・芸術・造形・美術工芸系

美術学部／芸術学部／造形学部／美術工芸学部 ほか同系統（造形芸術・美術文化・先端芸術・造形構想等）。1968年から一貫して存在。

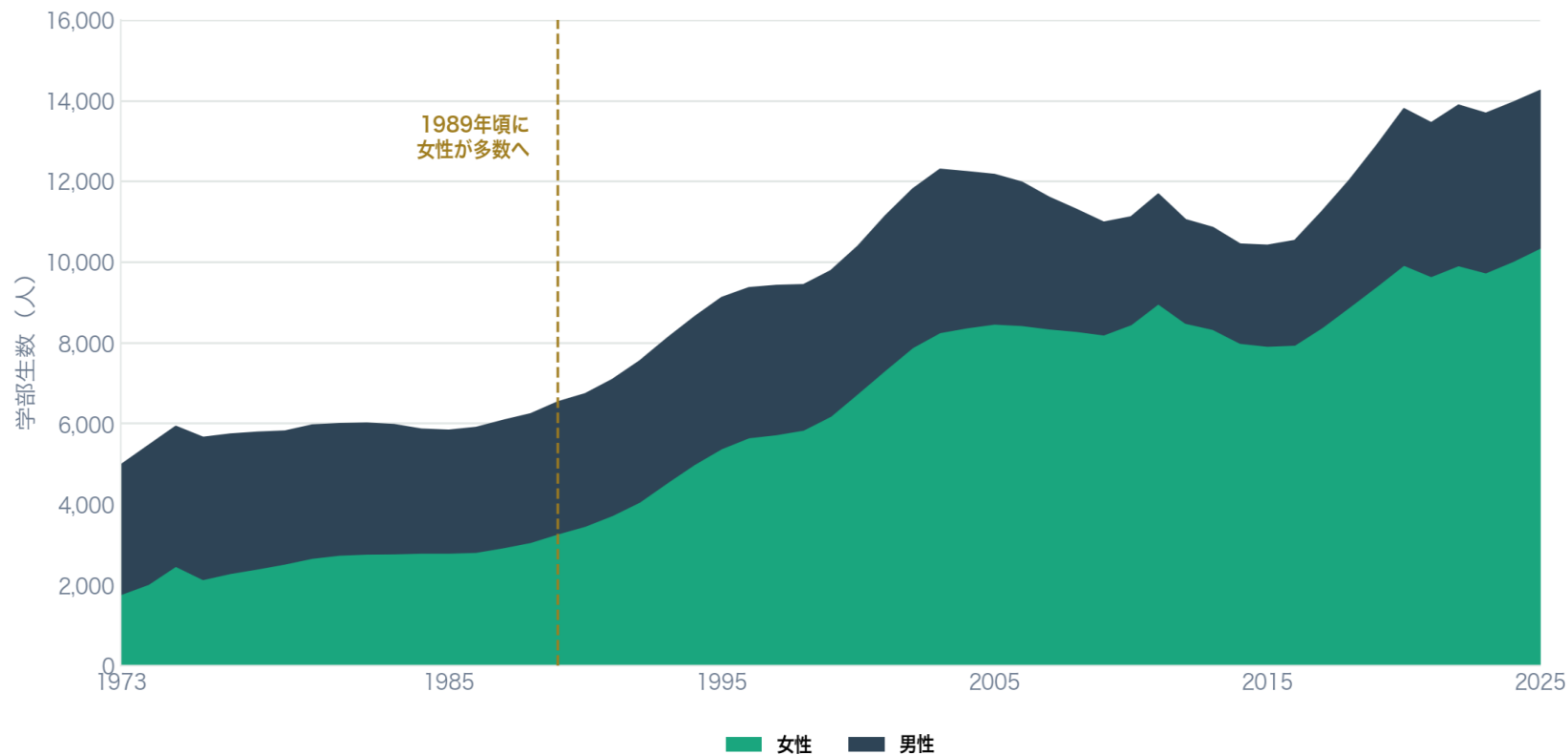
【除外②～⑦】

② 音楽 ③ 工芸 ④ デザイン系 ⑤ 芸術×工学（芸術工学/デザイン工学） ⑥ 複合・地域・観光 ⑦ 非美術デザイン（ビジネス/環境/福祉/システム等）

近年は学部名の多様化（特にデザイン系）で「美術系」候補が急増し、その多くは美術専攻か判別が難しい（例：ビジネスデザイン・環境デザイン）。年ごとに範囲が変わると長期比較の一貫性が損なわれるため、定義が安定した美術・造形・芸術系（①）に統一した。なお音楽は女性比率が高く、含めると水準が上振れするため別掲扱い。

参考：美術（関係学科別「芸術-美術」）の学部生数の推移（男女別）

「美術」を学ぶ人数の母集団（1973-2025年度・全大学） ※本編P7「美術系学部」とは母集団が異なる参考図（より厳密な定義）



1973年は男性が多数だったが1980年代末（約1989年）に逆転。以降、女性が一貫して多数で母集団（学ぶ女性）は大きく拡大。教授職の少なさは供給側の問題では説明しにくい。

本調査に関する問い合わせ先

一般社団法人NMWA日本委員会

ジェンダーバランス調査チーム

survey@nmwa-japan.com